

2024(令和6)年度 校内研究計画

1 研究テーマ

なかまと協働し、問題解決できる子どもの育成
～協働的な学びを実現するための授業デザインを通して～

2 研究テーマ設定の理由

(1) 今日的課題から

学習指導要領の前文においては、これからの学校について、「一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」と述べられている。このような姿を目指し、学校教育では、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えた子どもの育成が求められている。具体的に、育成を目指す資質・能力として、「①生きて働く『知識・技能』の習得」「②未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力』の育成」「③学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の3つの視点が示されている。特に、現在のような変化の激しい社会においては、自ら学び続ける力が大切であり、他者と関わりながら未来を創造していかなければならない。

そのような子どもたちを育成していくためには、既定の学習内容の定着を図るだけでなく、自ら課題を見付け、試行錯誤しながら他者と関わることで、自らの考えを深め解決していく授業改善の工夫が必要である。他者と関わる学習で基盤となるのは、表現力である。各教科等の特質に応じて、学習・支援方法の改善を図りながら自らの考えや思いを表現する活動を充実させ表現力を高めることは、「なかまと協働し、問題解決できる子どもの育成」につながるであろう。これは、今まさに予測困難な変化の激しい社会を生き抜く子どもたちにとって非常に大きな力になると考える。

(2) 本校の教育目標から

本校の教育目標は、「感謝と思いやりにあふれ、粘り強く、自ら学ぶ児童の育成」である。各教科等の特質に応じて言語活動を中心とした表現力を伸長することで、「知・徳・体」それぞれの面において、子どもの資質・能力を高めることができると考える。本研究テーマをもとに、学習・指導方法の改善を図ることで、何事にも主体的に取り組もうとする意欲が子どもの中に生まれ、他との関わりを通して様々な問題を協働的に解決し、未来の創造に向け、粘り強く取り組み続ける子どもの育成へとつながるのではないだろうか。さらに、「感謝と思いやり」にあふれる感性を子どもたちに涵養することによって、他者との関わりや協働的に解決できることに感謝の気持ちが一層高まり、相手を今まで以上に思いやる行動が見られるようになるのではないだろうか。よって、テーマに掲げた「なかまと協働し、問題解決できる子どもの育成」を図ることは、本校の教育目標の具現化につながるものと考えられる。

(3)これまでの研究の経緯と子どもの実態から

本校では、「自ら関わりを求め、問題解決できる子どもの育成」とテーマを設定し、4年間研究・実践を重ねてきた。研究の視点として、熊本市授業づくり5つの視点を基盤に、本校が独自に設定した授業を構想する3つの視点[①課題設定の工夫(問い)・②学び合いの工夫(対話)・③ふり返りの工夫(自己の変容)]を掲げ、重点的に取り組んだ。また、授業において意図的に読む・書く・話す・聞くなどの言語活動を取り入れたり、学習形態を工夫して対話を促し、子どもたちが他者と関わる機会を多く設定したりした。そこで今年度は、様々な教科での共通実践を行い、協働的な学びを通して問題解決していく力を付けていきたい。

他者との関わり合いを重視し、対話を活性化するために、表現活動の在り方をさぐる研究を行ってきた。実践の成果から、思考ツールやICTを活用して自らの考えを言語化し、他者の考えと比較して、自分の考えをふり返りながら対話を重ねていくことで理解を一層深めることができた。熊本市学力調査の結果分析では、どの学年においても、ペアやグループでの学び合いの場の設定の必要性が挙げられている。表現力の向上を図り、自ら学ぶ意欲をもち、課題に対し粘り強く取り組み続ける子どもの育成へとつなげていきたい。

研究の方法についても、個別最適な学び、協働的な学びを通して、「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、児童生徒のみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子どもたちの学びの相似形であると言える。そこで、教師自らが問いを立てて実践を積み重ね、振り返り、次に繋げていく探究的な学びを、教師自らがデザインしていくが必要になる。今年度は、教師一人一人がめあてを持ち取り組むことで、共通のテーマで児童の育成に努めていきたい。

3 研究テーマについて

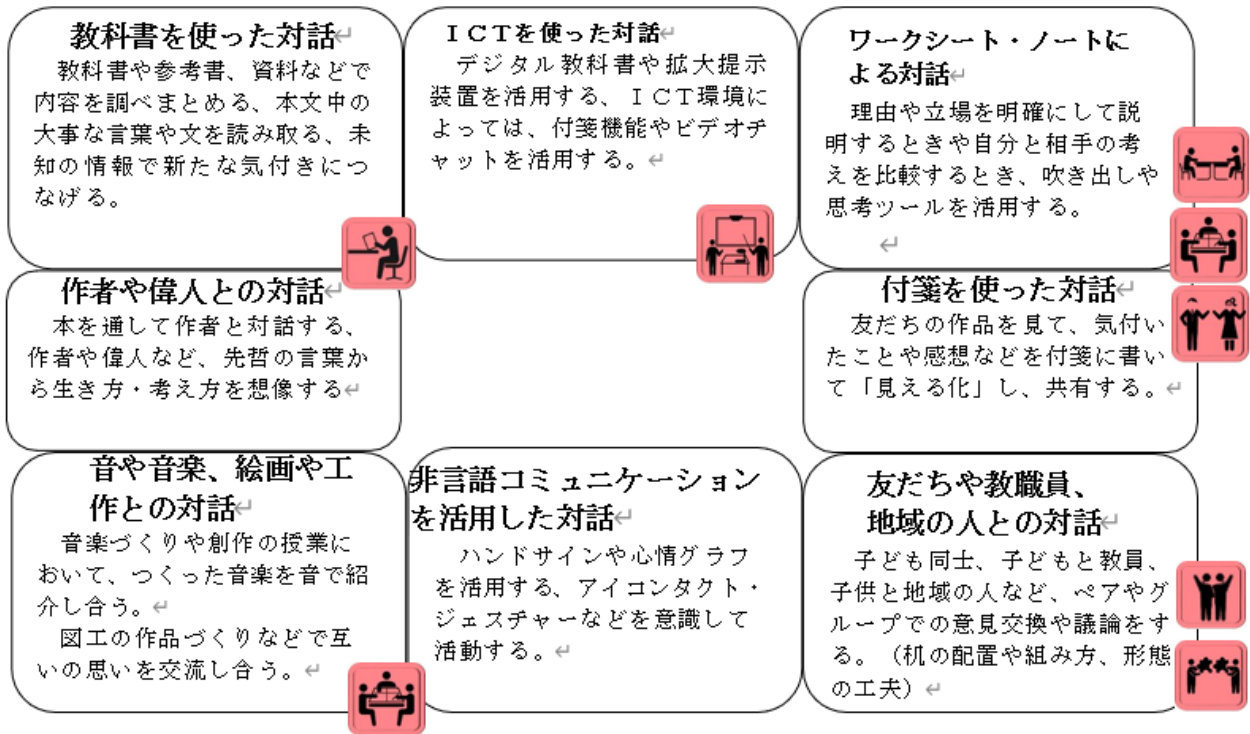
(1)「なかまと協働し」とは

児童一人一人のよい点や可能性を生かし、異なる考え方が組み合わせることで、よりよい学びを生み出す子どもの姿と捉える。例えば、テーマについてなかまとのグループディスカッションを通して、自分と異なる新しい考えに触れることで考えを広げて深める、納得解を見つける、自らの経験や知っていることなどを元にして予想を立てて個の学びを深め、子どもたち同士で共有したり検討したりする。このように、個の考えをもとにしながらか、話したり聞いたりする活動を通して、主体的・対話的で深い学びへと繋げていきたい。

(2)各教科での「表現」について(例)

 <p>互いの考えを比較する</p>	 <p>多様な情報を収集する</p>
 <p>思考を表現に置き換える</p>	 <p>多様な手段で説明する</p>

(3)「対話を中心とした言語活動」の各教科等での実践例について



4 研究の仮説

各教科における対話を中心とした言語活動を充実することにより、一人一人が自分の考えや思いを伝え合える協働的な学習環境を整え課題を明確にすれば、他者と関わろうとする態度が身に付き、自ら問題解決していこうとする力が高まるであろう。

5 目指す子ども像

- 積極的に対象と関わり、進んで課題を見つけていこうとする子ども
- 見付けた課題を解決していくために、他者と関わりながら自らの考えを深めていく子ども
- 友だちと関わりながら追究し、問題解決していく子ども

6 研究の視点

熊本市の授業づくり5つの視点

- ①子どもの実態に即し、本時のねらいに迫るめあての設定
- ②授業の見通しと、次につながるふり返りの工夫
- ③本時のねらいを解決する子どもたちの主体的・対話的・深い学び合いの場の設定
- ④学習意欲を高めたり、理解させたりするための教材・教具や発問の工夫
- ⑤子どもを認め、一人一人の子どもを生かす場の設定

泉ヶ丘小の授業を構想する3つの視点

- ① 課題設定の工夫（問い）
- ② 学び合いの工夫（対話）
- ③ ふり返りの工夫（自己の変容）

7 研究の方法

(1) 各教科における研究授業を中心とした仮設の検証

- ・大研3本(低・中・高)、中研3本(低・中・高)、つくし学級公開授業

授業にあたっては、学年部で検討を行い、事前授業や本時の授業の実践などを通して、チームで授業改善を深める。

(2) それぞれの授業者による探求型授業研究

- ・自分の授業の問題を発見し課題を設定する
- ・授業改善
- ・実践の共有(報告会)

8 研究の組織

